

研究分野	漁場環境	部名	浅海環境部
研究課題名	漁場環境監視調査		
予算区分	県単		
試験研究実施年度・研究期間	H. 17 ~ H. 21		
担当	小野寺 陽子		
協力・分担関係	東北水研（栄養塩分析）		

### 〈目的〉

漁獲対象生物にとって良好な漁場環境の維持を図るため、陸奥湾沿岸域における水質環境の現況を調査する。また、生物モニタリング調査（底質調査を含む）を行うことによって底泥中に棲息する生物（マクロベントス）の種類・現存量を指標とし、陸奥湾沿岸水域の漁場環境の長期的な変化を監視する。

### 〈試験研究方法〉

#### 1 水質調査

- (1) 調査海域 陸奥湾内 St. 1～11 の 11 定点
- (2) 調査回数 毎月 1 回
- (3) 調査方法及び項目

気象、海象、水色、透明度  
水温、塩分、D0、pH、栄養塩

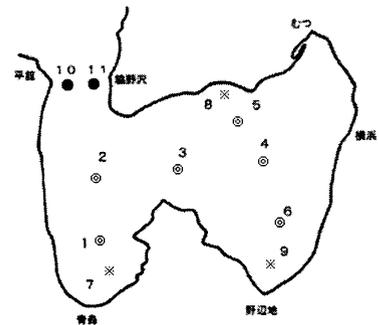
#### 2 生物モニタリング調査

- (1) 調査海域 陸奥湾内 St. 1～9 の 9 定点  
マクロベントスは St. 7～9 の 3 定点

- (2) 調査回数 7、9 月の 2 回/年

- (3) 調査方法及び項目

気象、海象、底質（粒度組成、COD、TS、IL）、  
底生生物（マクロベントスの個体数、湿重量測定、種の同定、多様度指数）



●: 水質調査地点 ◎: 水質・底質調査地点  
※: 水質・底質・底生動物調査地点

### 〈結果の概要・要約〉

含泥率、COD、TS、IL とも、沿岸部の St. 7、8、9 でその数値が低く、例年と同様、St. 8 では全項目の数値が最も低かった。そのほかの St. 1～6 では概ね湾の中央部付近で数値が高く、これらは例年と同様の傾向であった。COD は、例年同様沿岸部の St. 7～9 で 7 月、9 月では、水産用水基準値の 20mg/g 未満となったほかは基準値以上で、24.1～39.3mg/g の範囲であった。TS は、水産用水基準値の 0.2mg/g を超えた地点はなかった。底質の合成指標値は、ほぼ例年なみであった。底質の各項目の平成 19 年の分析結果は、概ね平成 8 年からの経年変化の範囲内で、ほぼ横ばい傾向を示し、底質の有機汚濁については、その進行を示すものではなかった。

底生動物調査については、St. 7 で、7 月に生息密度が過去最低、9 月に湿重量が最低、St. 8 で 7 月に多様度が過去最低となった。これらの値が、ただちに環境の悪化を示すとは言えないが、今後も注意深く推移を見守る必要がある。汚染指標種であるチヨノハナガイは St. 9 で 7 月に 0.5 個体/m<sup>2</sup> とごくわずかみられたが、海域の汚染を示すレベルではなかった。

### 〈今後の問題点〉

底生生物の出現状況監視強化

### 〈次年度の具体的計画〉

調査の継続、底層の貧酸素状態、底質、底生生物の監視強化。

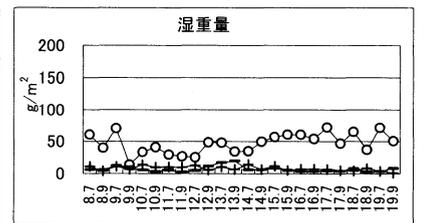
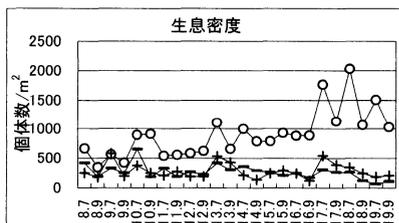
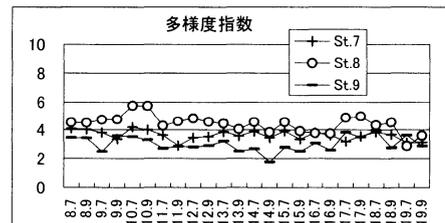
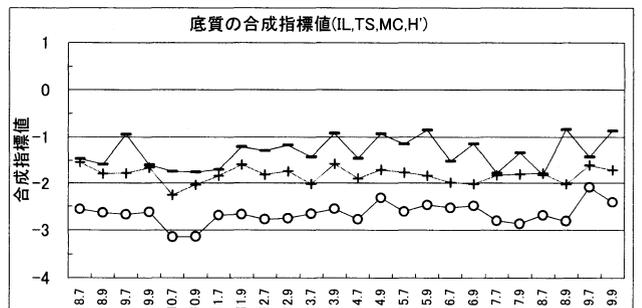
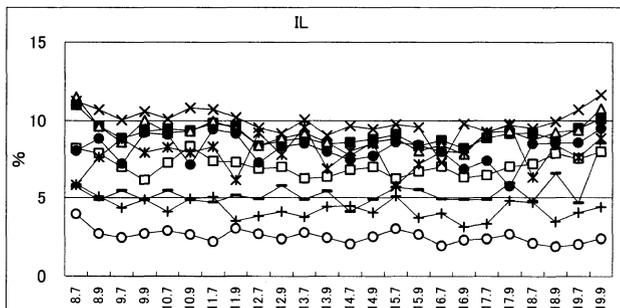
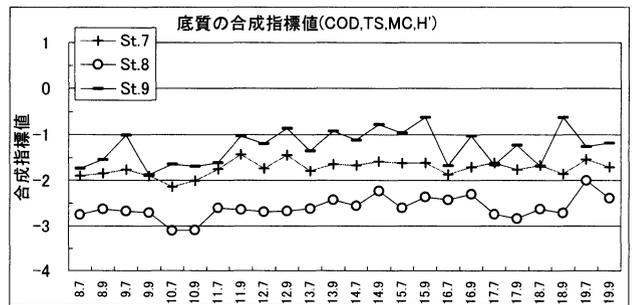
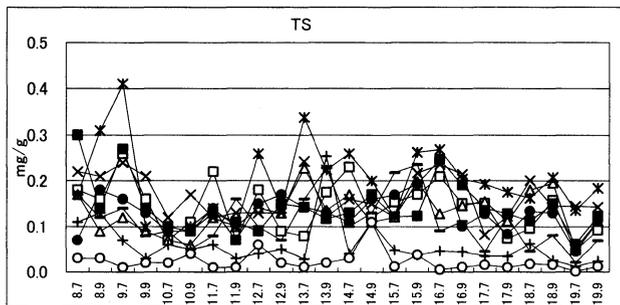
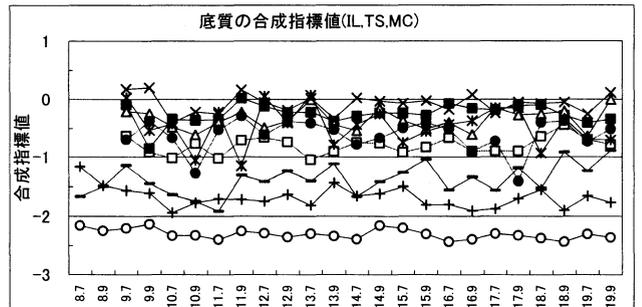
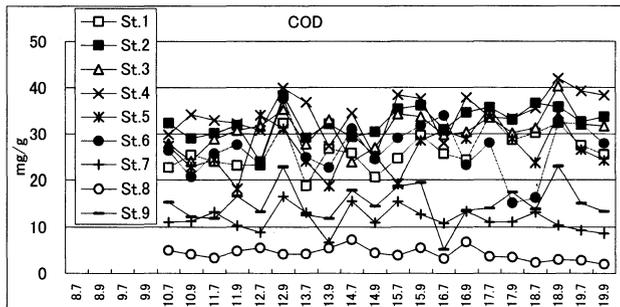
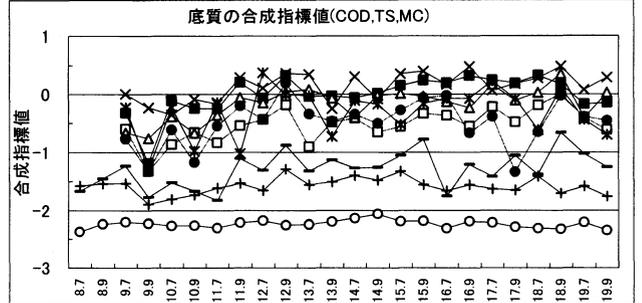
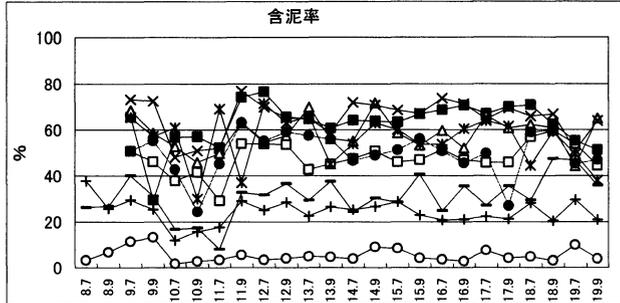
### 〈結果の発表・活用状況等〉

平成 19 年度漁場環境総合監視調査報告書作成予定

平成 20 年度漁場環境保全推進事業東北ブロック会議で報告予定

平成 20 年度漁業公害調査指導事業検討会で報告予定  
 平成 20 年度漁業環境保全総合美化推進委員会で報告予定

〈主要成果の具体的なデータ〉



注) 図の横軸は時系列で、年.月を示す。例えば 8. 7 は平成 8 年 7 月を示す。